

調子に乗れ！

男が一人海を見ている。  
彼はまだ何者か分からない。  
海を見ている以外何もしていないからだ。  
何もしていない人というのは他人を不安にさせる。  
これは心理学的にも定説だという話は聞いた事はないが、  
とにかく何もしていない人というのはこれから何をするか分からない人だと言っている。  
ここで重要なのが男の風貌だ。  
爽やかな若者であるか草臥れたおっさんであるかで後の行動の予測が大きく分かれる。  
しかし昨今はその予測も通用しなくなってきている事は皆さん御承知の通り。  
何もしていないというのは一番困る。  
何者であるか判るように何かしらをしていて欲しい。  
何もする事がないならせめて調子にくらい乗ってくれればいいものを。

登場人物 男1／海を見ていた男

男2／近所に住むお父さん

男3／役場に勤めている人

女1／女学生

女2／女学生

女3／女学生

女4／日傘の女

近所の人達

天気の良い昼下がり。

海岸の防波堤に立って、海を眺めている男が一人。

そこへ、ヘルメットとリュックを背負った学校帰りの女学生がやって来て、

女1 ここは、無理ですよ？

男1 …え？

女1 止めといた方がいいですよ？

男1 …何が？

女1 飛び込んでも。

男1 …は？

女1 見てください、浅いです。

男1 うん…。

女1 何があつたか分かりませんが、話くらいなら聞きますよ？

男1 はあ…。

女1 私、これから部活の練習があるんですけど、今日は休みます。

男1 …は？

女1 テニスやってるんです、軟式の。

男1 うん…。

女1 来週大会があるんですけどいいです、休みます。そうすると、きっと先輩に怒られると思います。来週大会なのに休むなんて舐めてるのかと、ネチネチ言われると思います。サクヤマ先輩って言うんです。サクヤマ先輩は三年生なんですけど一度もレギュラーになつた事なくてずっと補欠なんです。だから先輩の私が先にレギュラーになつてしまった事をずっと根に持つてるんです。何かって言うとすぐネチネチ文句を言うので私いつも気をつけてるんです。ボールの拾い忘れはないか、部室に入る時はノックをして先輩が着替えてないか細心の注意を払うようにしてるんです。でも今日はもういいです。休みます。きっとここぞとばかりにネチネチが始まると思います。それでも私は頑張ります。だって先輩はサクヤマ先輩だけじゃないから。他にも私を応援してくれる先輩がいるから。だからお

じさんも負けないでください。きっとおじさんの事見ててくれる人が居ます。少なくとも今、私は見てますから。

男1 あのね、

女1 はい。

男1 私、死のうとしてないですよ？

女1 …え？

男1 飛び込みませんから。

女1 …え？

男1 (微笑み) おじさんが、ここから飛び降りて死ぬと思つたんだ。

女1 違うんですか？

男1 低いですよ。浅いし。これではとても無理だね。

女1 ええ、だから風邪ひくだけです？

男1 うん、だからね、こんなところで死のうとする人は、本気で死のうと思つてないんじゃないかな。

女1 え？

男1 いや、大丈夫。おじさんは、そんな事思つてないから。

女1 そうだったんですか、ヤダ私…!!

男1 ごめんね、心配掛けて。

女1 いえ、じゃあ良かったです。今日は良い天気ですね。

男1 そうだね。

女1、去る。

すぐ戻って来て、

女1 本当に、気にしなくていいですよ？

男1 …え？

女1 休みますから、全然。

男1 あれ？…さっき、おじさんが言った事、信じてくれなかったのかな？

女1 はい。

男1 え？

女1 だって、これから自殺しようとしている人が本当の事言いますか？「死ぬんですか？死ぬんです」って、そんなの止められるに決まってるじゃないですか。だからおじさんは嘘をついた。いよいよこれは本当に自殺するんだなって思いました。

男1 なるほどね。君は賢いね。

女1 ありがとう。

男1 でもおじさんはね、嘘をついていない。ただ海を見ていただけなんです。海

って、あれば見るでしょ？君は、この辺りの子だね？

女1 はい。

男1 じゃあ見慣れているから見ないかもしれない。でも街の方に住んでいる人にとって、海は珍しいからさ、やっぱりこう見ちゃうんですよ。

女1 うん。

男1 そうするとね、いろんな事を思い出したり考えたりするんです。それが、何か思い悩んでいるように見えたのかもしれないね。ごめんね、紛らわしい顔で。

女1 リストラですか？

男1 …あのね、どう言えば分かって貰えるのかな。

女1 奥さんに逃げられたんですね？

男1 えっとね、リストラにもあつてないし、奥さんも居ないよ。

女1 奥さん居ないんですか！

男1 結婚してないから。

女1 一度も？

男1 うん。

女1 だから…。

男1 違うよ。

女1 え？

男1 そういう事では悩んでいないんだ。…そりゃあちよつとは悩んでるけど、別に死ぬほどの事でもない。一人が気楽で楽しいんだ、今は。

女1 え？

男1 本当だよ。またこんな事を言うと、余計な想像が膨らんでしまうでしょうが、それは本当なんだ。

女1、靴を見る。

男1 靴は汚いね。でもこれは、さっき山の方を歩いて来たから、その時にぬかるみを通らなければならなかったの、こうなってしまったんだよ。

女1 山を？

男1 首つりの場所を探していた訳じゃないからね、心配しないでくれたまえ。ただの散歩だよ。ここはほら、目の前には海があつて、後ろには山があつて、なんといいか、良い景色じゃないか。登山道みたいなのがあつたから、登ったら眺めがいいだろうなあと思って登ってみたんですよ。

女1 眺めがいいところ…！

男1 飛び降りなんかしないよ。ああ、そうか、おじさんがこうして立っているからいけないんだね、じゃあ座るね。座って、たばこでも吸おうかな。そうすれば、自殺するようには見えないよね？

男1、靴を脱ぐ。

女1 きゃ。

男1 違うよ。これは、靴が汚れているから、このまま胡坐をかくとズボンが汚れてしまうだろう？だから脱いだんだ。ほら、これから死のうとしている人が、ズボンの汚れなど気にするかい？この靴だつて変に揃えるからダメなんだよね。もうだいたい君の思考は分かつて来ましたから、そうだ、こうしよう、こんな感じで、おしやれに置いておこう。今にも死のうとしている人が、こんな風におしやれな、まるでショーウィンドウのような靴の置き方するかい？しないよね。そうしておじさんはたばこを吸いますよ。缶ビールでもあれば尚良いのですが、そこは演技力でカバーしよう。お気楽な感じでこう片膝立てて、どうだい？こうしていれば、どう見ても日向ぼっこでしょう？

女1 おじさん…。

男1 なんだい？おじさんは今、日向ぼっこをしているんだ。

女1 どうしてそんなにムキになるんですか？本当に違うなら私の言う事なんて聞かないで、どこかへ行ってしまえばいい。

男1 …それはね、君がおじさんを疑うからさ。そうか、そうだね、じゃあ行きますね。

女1 ちょっと待って下さい。

女1、アキレス腱を伸ばす。

女1 どうぞ。

男1 さては付いてくる気だね。

女1 はい。おじさんが電車に乗って帰るまで、きちんと見送ります私。

男1 そうか、うん。でも生憎おじさんは、まだ帰らないんですよ。今日は一泊するんです。山の上の、ほら、薫風荘というこの辺りでは一番の温泉旅館だ。もうチエックインしてあるんです。夜には懐石料理と天然温泉に入るのが楽しみなんです。ほら、これから死のうとしている人がそんな事を楽しみにすると思う？

女1 最後に良い食事をして、身を清めて、身辺整理も済ませて来たんですね。

男1 困ったな、どう言えば分かってもらえるのかな…。

女1 おじさん。

男1 はい。

女1 私はね、死のうと思った事がないので、死のうとしている人の心持は分からないんです。

男1 なるほどね。じゃあ、おじさんが死のうとしているなんて、どうしてわかるんだい？

女1 死のうとしている時つて、よほど複雑な心境なんだと思います。きっと常人には図り知る事のできない、あとから考えても理解が出来ない行動を取るんだと思います。

男1 うん、まあそうかもしれないけれど、でもそんな事を言われたらさ、何をしたらって自殺に結び付けられてしまうじゃないか。それはひどいよ。

女1 じゃあもう行きましょう、駅まで送ります。

男1 …だからね、今日は一泊するんです。

女1 あそこはこの辺りでは一番の旅館なんです。お部屋で自殺をしたら、名店の名に傷が付きます。

男1 しないと云つてるのに分からない子だな。

女1 私言いますよ？旅館の人に。

男1 君ね、いい加減にしないと、おじさんだつて怒るよ。

女1 だったら行きましょう、駅まで。

男1 …電車に乗れば良いのかい？電車に乗って、その先で死ぬかもしれないよ？それはいいのかな？

女1 はい、この辺りじゃなければいいです。

男1 なんだと？

女1 思い出すのが嫌なんです。ここでおじさんが死んだと思うと、もうこの道通れないです。でもこの道は、私の通学路なので、ここを通らないとずいぶん遠回りになってしまいます。

男1 …なるほど。おじさんの心配をしている訳じゃあなかったんだ。

女1 心配ですよ、今は。でも電車に乗った先の事までは分からないじゃないですか。この先ずつと、おじさんが死なないかどうか見続ける訳にもいきませんし。私の

大好きな人なら、この先一生ついて行く事も考えましようが、おじさんの事は別にそういう訳でもないのでごめんなさい。

男1 …は？

女1 あ、失恋が理由になると私のせいになってしまいますね。本当にごめんなさい。

男1 …あのね？

女1 ごめんなさい。

別の女学生がやってくる。

ヘルメットは手に持って、女1よりもやや大人っぽい印象。

女2 大丈夫？

女1 あ、うん。

女2 おまわりさん呼ぼうか？

女1 ううん、平気。

女2、男1を見る。

男1 …は？

女2 (女1を手で庇って) なんですか？

男1 何がですか…？

女2 おまわりさん呼びますよ？

男1 …私、なんにもしてないですよ？

女2 何にもしてない事ないじゃないですか。私見ましたよ、おじさんがこの子に

告白しているところ。

男1 告白なんてしてないじゃないですか…。

女2 じゃあどうしてこの子は断ってたんですか？すごく嫌そうでしたよ。

男1 本当に見てました？変な誤解をされたので、それを訂正してただけじゃない

ですか私は。

女2 変な誤解ってなんですか？

男1 ですから、私が死のうとしているとこの子が言うので、それは違うと言ったんです。

女2 それはちょっとひどくないですか？

男1 何がですか？

女2 え、断られたから死のうとしたんですか？

男1 …は？

女2 付き合ってくれないんだったら今ここで飛び降りて死ぬって、どういう神経してるんですか？

男1 いや、そんな事は言ってないですよ。え、ちゃんと見えました？

女2 こんなところから飛び込んでも死なない事分かってて、そうやってこの子をか  
らかったんですよね。

女1 え？

男1 …君たちは中学生？高校生？

女2 そこそんなに興味ありますか？

男1 まあどっちでもいいですけどね、

女2 どっちでもいいんですね。変態だわ。

女1 え？

男1 そういう意味じゃないですよ。もういいですよ(立ち上がる)。

二人、アキレス腱を伸ばす。

男1 …あのね、おじさんの事、幾つだと思ってるの？

女2 四十五才ですか？

男1 …いやその通りですよ。凄いな。

女2 変態だわ。

女1 え？

近所の人が出てきて、楽器の練習を始める。

男1 そりゃあこんなおじさんがね、君達のような子供に告白していたら、確かに変態かもしれません、私はしてないですから、変態じゃないですよ。

女2 じゃあどうしてこの子は断ってたんですか？告白したからじゃないんですか？

男1 彼女が勝手に断ったんですよ。

女2 勝手に断るなんてそんな事出来ませんか？何かを言われて、初めて断る事が出来るんじゃないんですか？

男1 うんだからね、おかしな事を言うなあと思っただけですよ私も。

女2 おかしな事を言っているのはおじさんですよさつきから。

男1 私が君達のような子供に告白する訳ないでしょう。

女2 それは振られたから強がりですって言うんですよね？

女1 え？

男1 分からない子だな、私にはそういう趣味はないんです。そんなの犯罪じゃないですか。

女2 じゃあおまわりさん呼びますね。

男1 うん私の事じゃなくてね、そういう人が居たらの話ですよ。

女2 そういう人ってどういう人ですか？

男1 初対面の未成年に告白する人ですよ。

女2 告白するくらいはいいんです。

男1 いいですよ、いいんですよそれは。

女2 じゃあ何がいけないんですか？

男1 だから、おじさんが、こういう未成年に告白する事ですよ。

女2 ですよ。

男1 ええ。

女2 じゃあおまわりさんを呼びますね。

男1 だから私の事ではなくてね。

女2 まさかおじさんはご自分の事をおじさんだと思っただけじゃないんですか？

女1 え？

男1 おじさんだと思っただけですよそりゃあ。

女2 おまわりさん呼びますね。

男1 だから告白するおじさんだったらおまわりさん呼んで貰っていいんですけど私は告白していない、普通のおじさんなんです。君も何か言ってくださいよ。

女1 告白だったのね、あれが…。

男1 君ね…。

女2 変態だわ。

女1 え？

演奏のテンポが上がる。

男1 そりゃあこんなおじさんがね、君達のような子供に告白していたら、確かに変態かもしれませんが、私はしてないですから、変態じゃないですよ。

女2 おかしいわ、じゃあどうしてこの子は断っていたんでしょう。

男1 彼女が勝手に断ったんですよ。

女2 勝手に断るなんて事出来ませんか？何かを言われて、初めて断る事が出来るんじゃないんですか？

男1 うん、だからね、おかしな事を言うなあと思っただけですよ私も。

女2 おかしな事を言っているのはおじさんですよさつきから。

男1 私が君達のような子供に告白する訳ないでしょう。

女2 それは振られたから強がりですって言うんですよね？

女1 え？

男1 分からない子だな。私にはそういう趣味はないんです。そんなの犯罪じゃないんですか。

女2 じゃあおまわりさん呼びますね。

男1 うん私の事じゃなくてね、そういう人が居たらの話ですよ。

女2 そういう人ってどういう人ですか？

男1 初対面の未成年に告白する人ですよ。

女2 告白するくらいはいいんです。

男1 いいですよ、いいんですよそれは。

女2 じゃあ何がいけないんですか？

男1 だから、おじさんが、こういう未成年に告白する事ですよ。

女2 ですよね。

男1 ええ。

女2 じゃあおまわりさんを呼びますね。

男1 だから私の事ではなくてね。

女2 まさかおじさんはご自分の事をおじさんだと思ってるんですか？

女1 え？

男1 おじさんだと思ってますよそりゃあ。

女2 おまわりさん呼びますね。

男1 だから告白するおじさんだったらおまわりさん呼んで貰っていいんですけど

私は告白していない、普通のおじさんなんです。君も何か言ってくださいよ。

女1 告白だったのね、あれが…。

男1 君ね…。

女2 変態だわ。

女1 え？

さらにテンポが上がる。

男1 そりゃあこんなおじさんがね、君達のような子供に告白していたら、確かに変態かもしれません、私はしてないですから、変態じゃないですよ。

女2 おかしいわ、じゃあどうしてこの子は断っていたんでしょう。

男1 彼女が勝手に断ったんですよ。

女2 勝手に断るなんて事出来ませんか？何かを言われて、初めて断る事が出来るんじゃないですか？

男1 うん、だからね、おかしい事を言うなあと思ってたんですよ私も。

女2 おかしな事を言っているのはおじさんですよさつきから。

男1 私が君達のような子供に告白する訳ないでしょう。

女2 それは振られたから強がりですう言ってるんですよ？

女1 え？

男1 分からない子だな。私にはそういう趣味はないんです。そんなの犯罪じゃないですか。

女2 じゃあおまわりさん呼びますね。

男1 うん私の事じゃなくてね、そういう人が居たらの話ですよ。

女2 そういう人ってどういう人ですか？

男1 初対面の未成年に告白する人ですよ。

女2 告白するくらいはいいんです。

男1 いいですよ、いいんですよそれは。

女2 じゃあ何がいけないんですか？

男1 だから、おじさんが、こういう未成年に告白する事ですよ。

女2 ですよね。

男1 ええ。

女2 じゃあおまわりさんを呼びますね。

男1 だから私の事ではなくてね。

女2 まさかおじさんはご自分の事をおじさんだと思ってるんですか？

女1 え？

男1 おじさんだと思ってますよそりゃあ。

女2 おまわりさん呼びますね。

男1 だから告白するおじさんだったらおまわりさん呼んで貰っていいんですけど私は告白していない、普通のおじさんなんです。君も何か言ってくださいよ。

女1 告白だったのね、あれが…。

男1 君ね…。

女2 変態だわ。

女1 え？

男1 そりゃあこんな…もう止めて貰えませんか？

近所の人、演奏を辞める。



近所の人 …？

男1 ああ、そうだ、あなたはどう思いましたか？今までの話を聞いていて。

近所の人 …。

近所の人、携帯電話をいじりだし、そのうち去る。

女1 私ね、告白なんてされた事ないから、

女2 だったら分からないよね、告白がどんなものか。

女1 うん。あれが告白だったなんて、随分廻りくどいのね。

女2 おじさんだから仕方がないわよ。若い子ならストレートなんでしようけど。

女1 おじさんの告白は廻りくどいの？

女2 うん。

女1 どうして？

女2 おじさんって言うのは、自分に自信がないから、ついつい廻りくどくなつてしまふの。

女1 自信が無い？

女2 自分がデブで気持ち悪い事を知ってるからよ。

女1 可哀想…、おじさん。

女2 同情しちゃダメ。おじさんになるまで放っておいたおじさんが悪いんだから。

女1 あれが、おじさんの告白だったのね。

二人、しみじみと男1を見る。

男1 あれはおじさんの告白じゃないですよ。いや誰の告白でもないです。告白って

言うのは、好きとか、付き合っして下さいとか、そういう好意のような言葉が含まれているものじゃないか。私の場合は一切そんな言葉使っていないんですから。

女2 どうだった？

女1 覚えてない、突然の事だったから…。

女2 そうよね、初めてなんだもんね。

女1 うん。

男1 君がほとんど喋ってたじゃないですか。ほとんど喋って、いきなりごめんなさいって言ったんです。

女2 この子は初めての経験なんですよ？初めての告白を、こんなおじさんにされたんですよ。もっと労わってあげたらどうなんですか？

女1 私、頭が真っ白になってしまつて…。

女2 可哀想に。イケるとでも思つたんですか？

男1 ですからね…、

女2 部屋を用意してあるとか言われなかった？

女1 言われた。良い部屋をとつてあるつて。

女2 やつぱり。

男1 いや、それはさ…、

女2 最近多いんですよ、変な事するおじさん。おじさんみたいなおじさんが都会からやってきて、私達田舎の女の子に大金チラつかせて変な事するのよ。本当に許せない。それを知らないうちにインターネットに流されて、ひどい目に遭つた子何人も居るんだから。

男1 そうなんですか…。

女2 この町には良い人しか居ないから皆免疫が無いんだけど、私は違いますからね。知ってますから色んな事。田舎だからってバカにしないでください。

男1 あね、私は違いますから、そういうおじさんじゃありませんから、本当に、信じてくださいよ。

女2 何を信じて言うの？おじさんみたいなおじさんの言う事の何を？おじさんの言う事なんて信じられる訳ないじゃない！

女2、泣く。

ついでに女1も泣く。

男1 その、「おじさん」というひとくくりにするの、止めて貰えませんか？おじさんの中にも良いおじさんは沢山居ますから。

女2 いいえ、良いおじさんなんかこの世に一人も居ません。おじさんは皆スケベで臭いんです。

男1 そんな事はないでしょう？この辺りにだっておじさんは居るでしょう？皆悪いおじさんなんですか？

女2 だってこの辺りにおじさんは居ないもの。

男1 そんなバカな。

女2 本当よ。

男1 「お兄さん」と「おじいさん」の間が「おじさん」ですよ？

女2 「お兄さん」と「おじいさん」の間は「お父さん」です。

男1 それはただの呼び方の問題で…、

二人、泣く。

男1 …やれやれ、よっぽどひどいおじさんに会ったんですね。それは本当に、申し訳ないと思ってますよ、おじさんとして。でもおじさんは、おじさんの名誉回復の為に頑張りますから、もう一度おじさんにチャンスを下さい、お願いします。

男がやって来る。

男2 どうされました？

男1 ほら居るじゃないですか、おじさん…。

男2 なにやら、お困りのようすな。

男1 そうなんです。この子達が、私を帰してくれないんです。

男2 よっぽど気に入られましたな。

男1 やっぱり遊ばれてるんですね、私は…。

男2 見た目はこんなですが、中身はまだ子供なんですな。

男1 知識がある分余計に性質が悪いです。

男2 私ずっと見てましたけどね、あなたは本当に優しい方だ。そこまで子供たちの

話に付き合う事もないでしょうに。

男1 そうなんですけど、誤解をされたままでは気持ち悪いですから。  
男2 さあ君達、もう帰りなさい。この人は、悪い人じゃないよ。

二人、顔を上げて、また泣く。

男2 あははははは。

男1 ありがとうございます。

男2 いえいえ。おや、靴が泥だらけじゃないですか。

男1 すみません、だらしなくて。こういう事が誤解を生んでしまうんですね。

男2 確か、ティッシュがあつたと思いますよ（ポケットをもぞもぞ）。

女2、靴を蹴り飛ばす。

男1 あ、何をするんだ！？

女1、男1の周りに何かを撒く。

男1 痛っ…！（拾い）ん、貝殻？なんでこんな物を持つてるんだ君は…。

女2 このおじさんは、水虫なのよー！

女2、靴を蹴り飛ばしながら去る。

男1 ちょっと君ー！返しなさい！

男1、砕かれた貝殻を手で払おうとするが、

男1 痛…、なんなんだ全く…。

男2 …。

男1 あ、あの、すみません、何か、箒の様な物、ありませんかね？

男2 箒の様なもの？箒では、ダメなんですか？

男1 ああ、箒で良いんです。すみませんが…。

男2 箒ですか…、ティッシュならあるんですが…。

男1 いや、ティッシュでは…。それか、履物があれば良いんです。裸足ではとても

この上を歩けないので。

男2 ハキモノ…、箒、ですよね…。

男1 ええ、確かに掃く物ですけど、私の言ってるのは、サンダルのような…、

男2 ああ、サンダルですか…。

男2、自分の足元を見る。サンダルを履いている。

男2 (見なかった事にして) どこかに無いですかね…。

男1 あなたのを、一瞬貸して頂けませんか？ここから出たら、あとは裸足で帰りますから。

男2 あ、私ので良いんですか？

男1 はい、いいです。ありがとうございます。

男2 ああ…、わかりました…。

男1 すみません。

男2 …。

男1 …あのお？

男2 帰ると言っても、どちらまで？

男1 薫風荘という、あの、山の上の旅館に泊まっているんですよ。

男2 ああ、あそこはいい旅館ですよ。海の幸と、温泉が有名なんです。

男1 ええ、知ってます。それで予約したんで。

男2 そうでしたか。ご旅行中でしたか。

男1 はい。

男2 それは良い、…こんな平日に？

男1 あのお、履物を。

男2 ああ、箒、でしたよね、有るかなあ…。

男1 いや、あなたの履物。

男2 え？…ああ、そうでしたね。

男1 ええ、すみません。

男2 …。

男1 …ん？

男2 …あの子は、どうして去り際にあんな事を言ったんでしょう？

男1 …え？

男2 あれは一体、どういう意味なのか…。

男1 私、水虫じゃないですよ？

男2 あ、そうなんですか？

男1 ええ、なんであんな事を急に言ったのか、訳が分かりません。

男2 ああ…。

男1 本当ですよ？

男2 ええ、なんだ、そうでしたか。

男1 はい。

男2 ひどいなあ、もう、ははは。

男1 ですよ。

男2 ええ。

男1 ええ。

男2 ははは。

男1 …あの、靴を？

男2 …。

男1 違いますよ？

男2 あ、いや、疑ってる訳ではないんですよ。だってあなたは優しい方ですから。

男1 じゃあ、お借りできますか？

男2 しかし…、

男1 はい？

男2 どれだけ優しいからと言って、水虫にならないという保証はありませんもんね。

男1 疑ってるじゃないですか…。

男2 いや、疑ってはいないんですよ、本当に…。あなたは良い方ですから。あのよ  
うに、子供達にも好かれるという事は、あれですか、先生か何かですか？

男1 いえ、そういう仕事は、全くしておりません。

男2 またまたご謙遜を。私ね、小学生の息子が居るんです。是非、勉強を教えてい  
ただきたい。

男1 まあ、それにはまず、履物を…。

男2 そうですね、はい…。

男1 お願いします。私はもう旅館に帰りたいんです。

男2 そうですよね…。

男1 ええ。

男2 あなたは、立派な方だ、それはもう間違いない。間違いないんです。

男1 でしたら…、

男2 でも幾ら立派な方でも水虫にはなるんだよな…。

男1 私は、水虫ではないんですよ。え、どうして信じてくれないんですか？

男2 本当ですね？本当に水虫ではないんですね？

男1 良く見てください、(靴下を脱ぎ) ほら、ほどよい湿気を含んだ、つるつとし  
た足です。

男2 ほどよい湿気を含んでいるんですか…？！

男1 だって水虫だったらもう少しカサカサしたイメージじゃないですか、私はなっ  
た事がないので分からないんですけどね。

男2 私もないんです。今まで一度も。だから余計に恐いんです。もし水虫だったら  
と思うと私…。

男1 ねえ、私の目を見てください。ほら、どうですか？私は、水虫ではない。嘘を  
付いているように見えますか？

男2 …見えないです。

男1 でしょ？

男2 見えないから辛いんです…。

男1 …なぜですか？嘘を付いているように見えないなら、そのサンダルを貸してく  
ださい。

男2 でも…、足にはほどよい湿気があるんですよ…？

男1 …それは、言葉のアヤですから、忘れてください。

男2 そうですね。そうですね。「ほどよい湿気」という言葉自体は、別に良いん  
ですもんね。ほどよい湿気の、カステラ。とかね。肉まんも良いですね。うん、  
大丈夫。大丈夫なんだ。

男1 では、

男2 でも足はダメだよー！(頭を抱え) あー、足はきついんです…。

男1 もう湿気は無い！ほら、もう、サラっさらです！砂もほら、パラパラ落ちるほ  
どです。

男2 あー、あなたの足の裏は、もう、汚くなっているじゃないですか…。

男1 …(ため息をついて) もういいです。

男1、貝殻を拾い出す。

男1 別の人に頼みます。

男2 …すみません。お役に立てなくて。

男1 いえ、出来ればどこから、履物をお借りして頂けると助かります。なんでも  
いいんです、この貝の上を歩ければそれで。お願いします。

男2 わかりました。私のじゃなければ…、ああ。

男1 いいですよ、私はなんでも。ここから出られれば。

男2 すみません、本当に…。

男2、その場で歯を食い縛っている。

男1 …何をしていますか？お願いしますよ。

男2 どうして私は、困っている人を助ける事も出来ないのかと、悔しいんです…。

男1 悔しがっている暇があるなら早く履物を。

先程の近所の人が、もう一人の近所の人を連れて来る。

そして女1と女2も、段ボール箱を持って戻ってくる。

男1 あ、戻って来たな。靴、返しなさいよ。ねえ？靴。私の。

一緒に男3もやって来ていて、

男3 一体、どうされたんですか？

男1 ああ、いえ、この人達が、まるで私の言う事を聞いてくれないんです。助けてください。

男3 (男2に) あなたは？

男2 いえ、私はこの子達とは違います。そうだ、この方に、あなたのその靴、貸して頂けませんか？

男3 靴？

男2 ええ。

男1 お願いします。

男3 いや、この子達が、貝殻が欲しいというので一体何に使うのか聞いてみたら、

女1 これは人助けですから。

女2 いいえ、悪い人を捕まえるんです。

女1と女2、貝殻を追加する。

男1 おいちよつと…!?

男3 とまあ、こう言うんでね、なんだか訳が分からないので来てみたんですが…、やっぱり訳がわからないですね…。

男1 私は何もしてないんですよ。ただ海を見ていただけなんです。そしたらこの子がやってきて、

男3 はあ…。

男1 本当ですよ、信じてください。

男3 ええ、まずは、お話を。

男1 私は、旅行で来たんです。あそこ、薫風荘という旅館に泊ってるんです。

男3 ああ、あそこは良い旅館ですよ。海の幸と、温泉が有名なんです。

男1 知ってます。だから予約したんですから。

男3 お名前を、お聞きしてもよろしいですか？

男1 山下と言います。山下幸次郎、四十五才です。

男3 山下さん…。

男1 はい。

男3 何か、身分証のような物ありますか？

男1 …は？

男3 あなたが、山下さんであるという、証拠なんですけど…。

男1 証拠と言われても…、運転免許証なら旅館に帰ればあります。

男3 あ、今は、持ってないんですか？

男1 今は、持ってません。

男3 ああ…。

男1 …え、なんですか？

男3 あ、いや、私は、運転免許証は、財布の中に入れてるんですいつも。

男1 私もですよ。

男3 ああ…。

男1 え？

男3 じゃあ、今は、財布も、持ってないんですね。

男1 ええ、ただの散歩のつもりでしたから。

男3 なるほど。

男1 え、旅館に電話して貰えば分かりますよ。

男3 あ、そうですか。じゃあ、電話して貰えます？

男1 いや、携帯電話を持ってないので。

男3 ああ…。

男1 携帯持っていない人だって居るでしょう…？

男3 まあ…。

男1 え、ちよつと…、なんですか？

男3 あ、いや、この子が言うには、あなたは自殺しようとしていたと…

男1 ええ、ですから、それは違うと言ってるんです。でも信じてくれないんですよ。

私は、自殺なんかしません。本当に、ただ海を見ていただけなんです。

女1 おじさん、人は必ず死ぬんです。死ぬ時になったら死ぬますから、急がなくていいと思いますよ。

男1 もう分かりましたから。私はもう海を見ません。だから旅館に帰して下さい。

男3 しかしこの子が言うには、あなたはアダルトビデオの撮影に来たのだと…

男1 は？

女2 このおじさんは、旅館に帰ってカメラを持って来るんです。そして盗撮を始めるんです。

男1 どこまで飛躍させるんですか…

女2 執拗に旅館に帰りがたがるでしょう、それが証拠です。

男1 この状況になったら誰だって帰りたくなるでしょう？訳が分からないんだから君達は。

男3 あなたは、どう思うんですか？

男2 え？

男3 あなたも、ここに居たんですよ？

男2 あ、はい。そうですね、この方は、とても優しい方だと思いました。社会的にも、信用出来ると思いますし、嘘を付くような人ではないと思います。

男1 あなたただ、まともな方は。

男2 ただ、水虫なんですよ。

男1 ちょっと…

女2 やっぱり！

男1 君ね、なんであんな事言うんですか？私が靴を履いてないからですか？

男3 なぜ、この方を信用出来ると思ったんですか？

男2 はい。水虫なんです、高校で先生をしていらつしやるからです。

男3 ああ、そうでしたか。どこの高校ですか？

男2 どこでしたっけ？

男1 …いや、あの、さつきも言ったんですけど、そういう事は、あの…

男2 え？

男3 ん？

男2 …え、私は、嘘を付いてないですよ。

男3 まあ、落ち着いて下さい、別に疑ってませんから。

男2 え、ちょっと待って下さい。言ったじゃないですかあなた、高校の先生をやっているって。

男1 いや、言っていないんですけどね、そういう事は…

男2 え？じゃあ何をやってるんですか？

男1 何もやってないです。

男2 …何も？

男1 今は。

男2 そうでしたか…

男3 なるほど、分かりました。皆さんの話をまとめると、あなたは今のところ、高校教師をやっていた時に生徒を盗撮してクビになり、その性病を活かしてインデーズでアダルトビデオを制作して日銭を稼いでいたが、水虫になったので自殺しようとしている方、そういう事でよろしいですか？

他 ああ。

男1 全くよろしくないです。

男3 え？

男2 でもそれが全てが繋がりましたよ？

男1 どういう人なんですかそれは…

女2 死ねばいいのに。

女1 ダメですよそんな理由で死んでは。

男1 違います。ねえ、ちょっとお願いしますよ。私は、そんな人ではありません、信じてください。

男3 いや、私もね、信じたいんですよ。

男1 でしたら、

男3 でも今は、この方達が言っている事を信じるしかないんです。

男1 なぜなんですか？

男3 だってあなた、今はまだ、何者か分からないから…。

男1 私の、一体どこが、どこをどう見たら元高校教師でアダルトビデオを作ってる水虫で自殺しようとしている人に見えるというんですか？

男3 うーん、どこがと言われると困るのですが…。

男1 でしょ？

男2 あれ？

男3 どうしました？

男2 そう言われるとだんだんそう見えて来ましたよ私。

男3 ほんとですか？

男2 不思議なものですな。

男1 あなたね…。

男3 しかし、見た目で判断は、なかなか出来ませんよ。悪い人そうに見えても、良人は居ます。まあ、その逆もしかりですが…。

男2 なるほどですね。

男1 あなたは警察の方ですか？

男3 いえ。

男1 じゃあ、警察を呼んで下さい。そしたら話が早い。

男2 あなた今、この人が警察官に見えたんですか？

男1 いや、そうじゃないですよ、でもそういう態度と口ぶりだったから。警官には見えませんよ、制服着てないし。

男3 では、何者に見えますか？

男1 役所にでも勤めてるんですか？お堅い印象なので。

男3 ああ。

男1 違いましたか？

男3 いえ、私、町役場で仕事をしています。

男1・2 え？

男3 なるほど。

他 へえー。

男1 …いや、今はたまたま当たりでしたが、それで私もそうだという事にはなら

ないですよ。あなた、そう見えて、漁師にだって見えますよ？しかも沖合に行くような漁師ではなくて、その辺でワカメとか採ってる漁師ですよ。

男2 あなた今、ワカメ漁をしている人をバカにしました？

男1 どうなんですか？役所に勤めているワカメ漁師なんて居るんですか？

男3 やはり見た目に、出てしまうんでしょうか…。

男1 …え？

男3 私の実家は、ワカメの養殖をしているんですよ。大学で町を離れるまでは、私も手伝ってました。

男2 わお。

男1 そんな…。

男2 凄いですね、あなた。

男3 さすがに実家の名刺はありませんが、役所の名刺ならあります。あなたさえ良ければ、実家に案内してもいい。とりあえず、どうぞ。（手を伸ばし）あれ？…どうぞ？

手を伸ばして届く距離ではないので、男1は何もせずただ見ている。

男3 さあ、どうぞ？

男2 届きませんか？

男3 あれ？あれ？

男2 おかしいなあ、もう少ししただけ…。

女1・2 頑張つて。

男3 あなたももう少し、手を伸ばせませんか？

男1 あなたは靴を履いているからこつちまで来たらいじやないですか！私は裸足なんですよ。

男3 もう少しなんです。もう少し、伸ばせませんか？

男1 全然もう少しじゃないですよ…。

男3 なるほど…。

男3、名刺を渡すのを諦めて、

皆、うなづく。

男3 今を見て、どう感じました？

男2 残念です…。

女二人、涙ぐむ。

男3 ですね。

皆、男1を見る。

男1 なんですか…？

男3 あなた、私の靴を無理やり奪おうとしたんですね。

男1 …は？

男3 近づいた私を人質に取って、皆さんにここから出すよう要求するつもりだったんでしょう？

男1 …何を言ってるんですかあなたは？

男3 私も信じたくなかったんです。あなたが、彼女達の言っているような人だなんて。しかし、こればかりは…。

男1 (近所の人達に) あ！あの、すみません、あなた、さつきから私の話を聞いてましたよね？何か言って貰えませんか？

近所の人 ……？

男1 外国の人ですか？

男2 皆さん聞いて下さい。この人は、悪い事をするような人ではなかったと思うんです。きっと、環境が良くなかったんです。

男3 環境のせいにしてはいけませんよ。皆同じ環境で生きていますから。目の前を、短いスカートを履いた女子高生が歩いていても、ほとんどの男は見なかった振りをする。しかしこの人は、盗撮をする。

男1 してないです、してないですよ？

男3 環境のせいにしてはいけません。誰しも言うんです。挨拶もちゃんとして、人当たりもよく、良い人だったと。そういう人も、犯罪者なんです。私達は、人を見る目を養い、その人の本質を、正しく純粋な目で、見極めなければなりません。

他 はい！

男3 しかし憎むべきは人ではなく犯罪です。そういう犯罪が、起きないような環境を作るのも私達の仕事です。

他 はい！

男3 今日は、良い天気だ。水平線がハッキリ見える。どうですか、最高の景色でしょう。この景色を見ていたら、心が晴れやかになる。…警察を。

女1・2 行つて来ます！

男1 ああ、そうですか。いや、じゃあそうしてください。警察を呼んでくれればこっちのもんだ。これでもう大丈夫。

近所の人たち、セクションを始める。

男2 罪を償って、いつかまた、この町に来て下さいね。水虫も、治して下さいね。

男1 もう放っておこう、警察が来たら全て解決するんだ。

男2と男3が歌い出す。

♪あなたがくれた 何かの種 植えてみたいと思うけど

あなたがくれた種だから 僕は植えずに持ってます

どんな花が咲くのかな 何かの実が生るのかな

あなたがくれた種だから あなたが生ればいいのかな

沢山あなたを靴に詰めて あなたを知らない誰かにも

あなたのあなたをあげましょう

あなたにはこのあなた あなたにもこのあなた



あなたがどんどん増えてって  
あー楽しいな楽しいな

男1 …なんて気持ちの悪い歌なんだ。

男2・3 え？

男1 あ、すみませんね、つい。

男3 町の歌募集のコーナーがありまして、それに出したんですよ。選には漏れたんですよが、投票の結果三位になりました。

男2 あ、あなただったんですか？

男3 え？

男2 私、投票しましたよ！

男3 そうでしたか、あなたが唯一の一票をくれた方だったんですね。

男2 そうなんです。

男3 道理で歌えた訳だ。

男1 一票で三位ですか…。

男3 三本しか応募が無かったんです。

男1 だったらこの人が投票しなくても三位でしたね…。

男3 そんな事言わないでください。せっかく投票してくれたんですから。

男2 そうですね。私は本当に良い歌だと思ったから投票したんです。好きな人が増

えて行くなんて、とても幸せな事じゃないですか。

男1 そこが気持ち悪いんです。どうしてどんどん増えて行くんですか？

男2 好きな人なんですよ？嬉しいじゃないですか？

男1 幾ら好きな人でも、沢山居たら嫌いになりますよ。

男2・3 え？

男1 え、嫌いになるでしょう？

男2 え、え？

男3 え？

男1 好きな人って言うのは、一人しか居ないから好きになるんですよ？

男2・3 え？

男1 あつちにもこつちにも好きな人が居たら、誰が好きなのか分からなくなるじゃないですか。

男2・3 え？

男1 なんで分からないですか。もういいですよ。

男2 おかしいなあ。家に帰ったら好きな人が居るんですよ？リビングにも、寝室に

も、お風呂にも。

男1 気持ち悪いわ。

男2 え？

男3 好きな人がたくさん居れば、こつちの好きな人が機嫌悪くなくても、こつちの

まだ機嫌悪くならない好きな人のところに行けばいいんですよ？

男1 機嫌悪くなっちゃった好きな人はどうしたらいいんですか？

男3 それはまた別の好きな人がなんとかしてくれれますよ。

男1 ひどいな。

男2 好きな人が好きな人の機嫌を直してる姿を見たら、また好きになっちゃいます

ね。

男3 そうそう。

男2 それにこの歌の良いところは、全国各地に好きな人が居ますから、一人でどこ

かへ行ってもその先で好きな人に会えるんです。

男1 好きな人なら連れて行ってあげましょうよ。

男2 わからないかなあ…。

男3 どうしたら伝わるんでしょうね、この感覚。

男1 それはこつちの台詞ですけどね。

男3 好きな人の、いろんな部分が一度に見られるんです。これほど幸せな事はない。

男1 ですから、そのいろんな部分が合わさって好きな人になるんです。それが「好

きな人」って事なんですよ。

男2・3 うーん（首をかしげる）。

男1 なぜ分からないんだ…。

女1と女2が、女3を連れて戻って来た。

女3はジャージを着ている。

男2 …警察は？

女1 おまわりさん呼びに行っただんですけど、その途中この子に会って、ね？

女2 このおじさんの話をしたんです。そしたら…、

女1 どう？

女3 …うん。

女3、男1を見ている。

男1 あの、私がおまわりさんと呼んで来て貰いたいんですね…？

男3 これはさすがにこの人の言う通りだ。どう見てもこの子はおまわりさんじゃない。

男2 まさか名前が、「緒馬、割」さんですか？それとも「尾周、李」さんですか？

女2 田中さんです。

男2 そう。

女1 どう、分かる？

男1 …今度はなんですか？

女3 …うん、きつとそうだと思う。

女1 …そう。

女2 …あり得ない、そんなの。

男1 …やれやれ。どうなってるんだ一体。どうしてこの辺りにはまともな人が居ないんですか？もういいですよなんでも。はい、認めますから、私は、自殺しようと思っただけに来ました。違法な手口でアダルトビデオを制作、販売していたので警察に追われています。それに加えて水虫もあります。もう生きているのも辛いので死のうと思っただけです。さあどうぞ、警察呼んで下さい。

男3 …認めるんですね、ついに。

男1 認めますよもう。逃げも隠れもしませんし、逃げも隠れも出来ませんからこの状況じゃ、どうぞ、捕まえてください。

女2 …本当なの？本当なんですか？

男1 いいですよ、もうそれで…。

女2 まさかそんな、そんな人が居るなんて…。

男1 すみませんね本当に。はい、私はそういう最低な人間なんです。だから早く警察呼んで下さい。

女2 呼べませんよ…。

男1 なぜですか？

女1 この子、二年前にお父さんが蒸発したんです。

男1 …え？

女3、涙ぐむ。

男2 まさか…！

男1 …いや、ちよつと待つて下さいよ…。

男3 証拠はありますか、写真か何か？

女3 (首を振る)…。

男2 証拠なんて要らないでしょう。だってこの人、今までの事を全部自分で認めたんですよ。

男3 そうですね…。

男1 いや、それはいいですよ。さすがにそれは、認める訳には…。

男2 あなた、この町の人だったんですね…。

男1 冗談じゃないですよ。ねえ、どうして私がお父さんだと思っただけですか？二年前ですよ？さすがに顔は覚えてるんじゃないですか？

女2 お父さんだなんて言ってない。

男1 え？

女1 この子のお父さんが居なくなっただけじゃなくて、お母さんも居なくなっただけです。

男2 …なんだって？！

男1 ちよつと待つて、性別が、性別が違うじゃないですか…。

女3 お母さん…。

男1 もういい加減にしなさい！！

他 おお…。

男2 …お母さんみたいだ。

男1 あのですね、そんな事を言い出したらもうなんでも有りになっちゃいますよ？

いいんですかそんな事で？

男2 なんでも有りになってしまったのはあなたじゃないですか。いや奥さんですよ。

奥さんが性転換までするからですよ。

男1 いや…、

男2 だって全部認めたじゃないですか。

男1 それとこれとは話が違うでしょう。そうでも言わないと警察呼んでくれないじ

やないですかあなた達。

男2 もういいじゃないか奥さん、娘さん泣いてるんだぞ。

男1 私は、その子の名前も知らないんですよ？

女1 記憶を失くしてしまったのね…。

女2 よほど辛かったんですよ、旦那さんが居なくなつた事が。

男2 確かに奥さん言っていました。好きな人はたった一人で良いって。一人しか居な

いから好きなんだって、あれ、旦那さんの事だったんですね！

男1 ダメだ、私が何を言ってもこじつけられてしまう…。

男3 皆さんちよつと落ち着いてください。もしこれが本当だとしたら、大変な事で

すよ。この人は、見た目を変えてしまったんだから。

男1 そう、そうですよ、あり得ないですよ。

男3 性別も変えて、整形までして、わざわざ不細工に、とてもまともな精神状態じ

やあない。

男1 ええ、自分の事を言うのもなんですけど、こんな不細工にはなろうと思つてもな

れないです。

男3 君は、この不細工を見て、どうしてお母さんだと思つたんだい？

男1 そうだ。

女3 二人から、貝殻の真ん中に立っている怪しい人物が居ると聞きました。私その

時、ピンと来たんです。お母さんじゃないかしらつて。

男1 意味が分からないよ…。

男3 うん、それで？

女3 私のお母さんは、とても美しい人でした。

女2 どうしてそんな醜い姿になってしまったの？！

男1 うるさい！

女3 手先が器用で、拾つて来た貝殻でアクセサリを作ったりしていました。学校

帰り、部屋を覗くと、お母さんは貝殻に囲まれていて、窓から差し込む光は貝殻

とお母さんを照らしてキラキラ光つてた。私その時、この人はビーナスなんじや

ないかと思いました。

男2、(男1を見て)まさにこれは、ポツティエリの有名な絵画「ビーナスの誕生」

…！

女1 本当だわ見て、ちよつと貝殻の真ん中に立ってる！

男1 これは君達がやつたんでしょが…。

女2 見た目が残念だわ…。

女3 「ただいま」「お帰り」…、それが、私がお母さんと交わした最後の言葉でし

た。

男3 最後の…。

女3 お母さん、お父さんは見つかったの？

近所の人達は演奏を、

男1以外の人達は防波堤に腰を下ろす。

女1 (男1以外に) この子、私のクラスメイトで、早苗ちゃんて言うんです。お父

さんとお母さんが居なくなつてからは、おばあちゃんと一緒に暮らしてる。それ

以来、学校にも来なくなりました。ずっと、お母さんの帰りを待つてたんです。

男3 なるほど…。

男2 可哀想に…。

女2 あなた、凄い自分勝手だと思います。娘の事はどうでもいいんですか？

女2 あなた、凄い自分勝手だと思います。娘の事はどうでもいいんですか？

女2 あなた、凄い自分勝手だと思います。娘の事はどうでもいいんですか？

男1 …。

女1 この人は記憶が無いの、言ってもしょうがない。

女2 その事にしてもよ。あなたは記憶を失くしたけど、早苗ちゃんは今失くしてないんですよ？夫に逃げられて、探しに行つて、見つからないから記憶を失くして、おじさんになつて帰つてくる。どうかしてらわ。

男1 そうね…。

女2 え？

男1 もう観念するわ。

他、ざわつく。

男1 私、記憶を失くしてなんかいない。

女3 え？

男1 やっぱり親子ね。どれだけ外見を変えても分かつてしまうんだもの。

女3 お母さん…？

男1 私のわがままで出て行つたんだもの、どの面下げて戻ればいいのか分からなくて、それで整形したのよ。

男3 …わざわざおじさんにならなくてもいいじゃないですか。

男1 これが、私の罪滅ぼしだったの。

男2 なんて過酷な罰だ…。

男1 早苗…。

女3 …はい。

男1 ごめんね、お母さん、あなたの事を放つたらかしにして…、お母さんが悪かつた…。

女3 …ううん。

男1 本当にごめんなさい（女らしく頭を下げる）。

女3 …お母さん。

男1 あなたの顔、良く見せて。

女3 うん…。

男1 （手を伸ばし）ついでに履物を貸してちょうだい。

女3 え？

男1 お母さん、おうちに帰りたい。

女3 うん。

女3、貝殻の円に入る。

男3 ダメですよ！…おいこれはダメだ。あんた記憶戻ってないだろ。

男1 …え、何を言つてんの、私は、早苗のお母さんよ。さあ、履物を貸して。

男3 ダメだよ早苗ちゃん、この人の言葉に耳を傾けちゃダメだ！

女3 え？

男3 あんた、ここから出たいだけだろう。

男1 …そんな事ないわ、そんな事ないわ。

男3 早苗ちゃん、この人をここから出したら、またどこかへ行つてしまふよ。

女3 そうなの、お母さん…？

男1 早苗、お母さんの目を見て。私はもう、どこへも行かない。ずっと、あなたと一緒に暮らして行くの。

女3 ずっと？

男1 ええ、ずっと。

女3 …。

男3 あなたの名前を教えてください。記憶を失ってないなら、名前を言えるでしょう。

男1 …一度、二人だけで話をさせてください。

男3 ダメですよ。

男1 早苗、お母さんと一緒に話したいよね？

女3 うん。

男1 ほらみる。

男3 早苗ちゃん、君にはこのおじさんが、本当のお母さんに見えるんだね？

女3 うん。

男3 君のその感覚は信じよう。しかし、このお母さんが何を考えているか、それはまだ分からないんだ。

男1 早苗、お母さんと話をしましょう？

男3 いいかい、今は三つの可能性がある。一つは、このお母さんが、本当に記憶が戻っている。

女3 うん…。

男3 二つ目は、本当は戻っていないけど、戻った振りをしている。その場合、なぜそんな振りをしているのかが分からない。

男1 そんな訳ないわ、早苗ちゃん。

男3 三つ目は、この人はお母さんじゃない。

女3 え…？

他、ざわつく。

男3 やっかいな事は、お母さんじゃない人が記憶が戻ったお母さんの振りをしている事と、本当のお母さんが記憶が戻った振りをしている事は、全く見分けがつかないって事なんだ。

男2 おいもう止めてくれ、頭がパンクしそうぞ。

男3 一見どちらも同じ様に見えるが、恐ろしい事に自身は全然違う。

男1 この人の言っている事は、ただの可能性の話よ。本当に記憶は戻っているんですからその心配なさなくて大丈夫。

男3 記憶が戻った人が、履物の事をそんなに気にしますか？

男2 た、確かに…。

男1 この状況なのよ？履物は欲しいじゃないのよ。

男3 娘との再会の次に履物だったじゃないですかあなた。

男2 そうだ！

男1 履物が無かったら娘を抱き締める事も出来ないじゃないのよバカ。

男2 それもそうだよ…。

女3 …お母さん、本当に記憶を失くしていないの？

男1 …。  
男3 名前、言つて下さいよ。

皆、注目。

男1 …そうね、もう正直に言うわ。記憶は…、ちよつと失くしてる。

女3 ちよつと…？

男3 ちよつとつてどれくらいですか？

男1 ちよつとあの人うるさいわ…、頭キンキンする。

女3 どこまで覚えているの？

男1 …どこまでつて？

女3 家を出て行く時の事は、覚えてる？

男1 …そうね、それは…、うん。

女3 いつ出て行ったの？

男1 …朝よ。

女3 朝？

男1 あ、でももう、夜に近い朝だったわ。朝に近い夜と言つてもいい。

女3 私は？寝てた？

男1 …寝て、

女3 …。

男1 た。

男3 寝てた事を知つてると言う事は、出て行く時に早苗ちゃんを見たんですね？

男1 …見たわ。

男3 どんな格好してました？

男1 …え？

男3 何着てましたか？

男1 ちよつと変態よあの人。

女3 お母さん。

男1 …ん？

女3 私もね、実はお母さんの事見えた。

男1 …え？

女3 薄眼を開けて、お母さんが出て行くところ、見てたよ。

男1 …。

女3 私、お母さんはもう帰って来ないんだなって思った。私は、捨てられたんだって。

男1 …早苗。

女3 それから起きて、ご飯を炊いて、朝ごはんを作った。初めて自分一人だけで、それで学校に行つて、普通に授業を受けて、帰つて来て、また、晩御飯を作った。

次の日は学校を休んだ。三日経つて、おばあちゃんの家に行つた。

男1 …ごめんね、お母さん、もう、どこにも行かないから。ずっと、早苗のそばに居るから。

女3 本当？

男1 約束する。

女3 おばあちゃんはね、凄くお母さんの事、怒つてた。

男1 うん…。

女3 今でも怒つてる。

男1 …そう。

女3 お父さんが居なくなつたのはお母さんのせいなのに、そのうえ自分まで出て行くなんて許せないって。

男1 …私の、せい？

女3 私はどっちのせいとか、分からない。どうして二人がそうなつちやつたのか、別にどうでもいい。

男1 うん…。

女3 私は、また三人で暮らしたいの。

男1 …早苗。

女3 お父さんには会えたの？

男1 …うん、会えたわ。

女3 どこに居たの？

男1 …あの、あれよ、あそこよ、大阪。

女3 …そう。

男1 大阪で、いか焼きとか、焼いてた。女の人と暮らしてたわ。

女3 女の人？

男1 そう。

女3 どんな人だった？

男1 …だからあれよ、ショートカットの、小柄の、若い人よ。昔からそういうタイプが好きだったからあの人、相変わらずだなって思ったわよ。

女3 それで自棄になつて、姿を変えたの？

男1 そうよ。

女3 …その人ね、

男1 ん？

女3 お父さんの妹だよ。

男1 …え？

男3 ！

女3 お父さん、大阪のおばさんのところに行つてたの。

男1 …ああ。

女3 どうしてだか分かる？

男1 …え？

女3 お父さんね、お母さんが浮気してた事知つてた。

男1 …ん？

女3 それに耐えられなくなつてお父さん、出て行つたのよ。

男1 …は？

女3 それなのに自分が浮気されたらショックで整形するなんて、バカじゃないの…。

男1 …え、そんな人なの、私？

女3 それも忘れてしまったのね…。

男1 …ちよつと、戸惑いが隠せないです…。

男2 え、本当にそういう人が居るのかい？大阪に、そういうおばさんが。

女3 はい。いか焼きも売つてる鉄板焼きのお店やってます。

男達 ……そう。

女3 でももういい。お母さん、本当にもう、どこにも行かないのよね？

男1 ……ん？あ、うん…。

女3 そしたら私、今までの事は全部忘れる。一緒にやり直そう。また家族三人で。

男1 ……うん、……そうね。

女3 履物取ってくる！お父さんも待ってるから！

男1 ン、ん？！ちよつと待って早苗！

女3 はい。

男1 ……ん、お父さん、居るの？

女3 うん、居るよ。

男1 ……え、帰って来てるの？

女3 うん。

男1 ……え？

女3 ちよつと待ってて。

男1 あ、ちよつと…。

女3 はい…。

男1 ……いや、あの、まさかお父さん帰って来てるなんて知らなかったから…、

女3 喜ぶと思う、お父さん。

男1 え、でも…、私、こんなだし…。

女3 大丈夫だよ。

男1 ……なんでそんな自信あるの？

女3 だってお父さん、今でもお母さんの事大好きだから。

男1 ……いやいや、見た目が…、見た目がもう、ねえ？

他 ……。

女3 お父さんは、お母さんの見た目なんて気にしないよ。お母さんの幸せだけを願

ってるような人だから。きつと大丈夫。

男1 いや、でも、あの、心の準備が…。ほら、ついさっきまでおじさんとして生き

て来た訳じゃない私。急に女に戻る事に、まだ慣れてないって言うか…。

女3 ……じゃあ、どうする？

男1 ……そうね…、とりあえず、喫茶店にでも行きたいわ。

女3 喫茶店好きだったね。

男1 うん、そうなのよ。

女3 じゃあお父さんも喫茶店に連れて行けばいい？

男1 あ、ああ、まあ、その方が話しもしやすいって言うか…、うん。

女3 わかった。じゃあ、いつものあの…、

男1 あ、うん、いつものね。

女3 なんて名前だっけ？

男1 え？

女3 いつもの、あの…、

男1 名前なんていいじゃない。

女3 えつと、ド忘れ、なんだっけ？

男1 ……さて、なんででしょう？

女3 えー、ヒント。最初の文字。

男1 ……うんと…、

女3 あ、ナ…、

男1 うん、ナ？

女3 ナイン…、

男1 ナイン？

女3 あ、ナイス…、

男1 そうそう、ナイス…？

女3 イン。

男1 そう、ナイスインね！懐かしいわ。

女3 あ、ナイスデイド。

男1 ……うん、ナイスデイドだったね…惜しかったね！

女3 じゃあちよつと待ってて！

男1 (怒りを滲ませ) うん！！

女3、去る。

男1、頭を抱えている。

へい、シューズ、プリーズ。…。

男2 じゃあ、私達は、行きますか。

近所の人達、男1を見て、演奏を始める。

男3 ……参りました。まさか本当の奥さんだったなんて…。

女1 良かったじゃないですか。これで家族が元通りになったんですから。

男1 ……なんだよ。

女2 でもショックがでかすぎないかしら。やつと帰って来た奥さんが、こんなおじ

さんになってたら。

女4が日傘を差してやって来た。

男2 そうだね、朝起きたら、隣にこの顔があるんだもんな。ネグリジェを着て。

演奏に合わせ微かに鼻歌を歌っている。

女1 見た目なんか、三日もあれば慣れますよ。大切なのは、心です。

男1には目もくれず、海を眺めながら。

女2 知った風な事言って。

女1 へへ。

男1 ……あのー？…すみません。…あのー？

男2 (男1をしみじみと見ながら)それが出来たら、本当に深い愛だ、私は耐えら

れるだろうか…。

女4、歌っている。

女2 あなたのせいで、皆が傷ついた事を忘れてくださいね。

しばらくすると、男2、男3、女1、女2、女3が戻って来た。

女1 でもこの人が、一番取り返しのつかない傷を負ってるわ。

女3は女物のサンダルを持っている。

女2 自業自得よ。

皆 ……。

男1 ……。

男1 皆さん帰ったんじゃ…？

男3 思わぬ事に足を突っ込んでしまいましたね。じゃあ、あとは家族水入らず。

男3 ええ、帰ろうと思っただんですが…、

女2 お幸せに、おじさん同士。

女3 お母さん、はいコレ。

男2 浮気はもうダメですよ。

男1 あ、ああ、ありがとう…。

女1 早苗ちゃんに、明日の朝迎えに行くって伝えてください。一緒に学校行こうっ

女3、その場から動かない。

て。

皆、去って行く。

男1 ……？

波の音。

皆、歌っている女4を見る。

しばしの間。

男1 ……あの人(女4)、さっきから何やってるんですかね？

男1 (近所の人に)あのー、すみません。…あー、ヘルプ。ヘルプミー。シューズ、

男1 ……あの人(女4)、さっきから何やってるんですかね？

男1 ……あの人(女4)、さっきから何やってるんですかね？



皆、すぐに視線を戻し、

女4はいつの間にか歌うのを止めて、海を見ている。

男2 そんな事より奥さん、もう一度だけ、確認させて貰っていいですか？

男1 何ですか？

男2 あなたは、本物の奥さんなんですよ？

男1 ……そうですよ。

男3 ……

男2 ほら、こう言ってるんですから、もういいじゃないですか。あとは家族の問題ですよ。

男3 しかしね…、

男2 心配し過ぎですよ…。

女3 お父さんは、そんな人じゃありませんよ…。

女1 そうですよ、大丈夫ですよ、きつと。

男3 私だって、そう、信じたいですけど…。

男1 ……どうか、したんですか？

男2 いえね、私達、さつき帰る途中、早苗ちゃんのお父さんに会ったんですよ。

男1 ええ…。

女1 優しいお父さんですね。

男1 ああ、そう…。

女1 凄く優しいそう。

男1 うん。

男2 でも、少し気になる事があって…、

男1 はい。

男2 金属バット持ってたんですよ。

男1 ……え？

女1 あれは練習してたんですよ、ね？

女3 あ、うん…。

女2 背広着て？

女1・3 ……

男1 ……ん？

女2 あの金属バットだって、皆さん気付きました？いろんなところが凹んでました。

男3 ええ、見ました…。

女2 金属バットが凹んでるって、どこ叩いたの？

女1 凄く練習熱心なのよ！

男3 お母さんの事は、伝えただよ？

女3 はい…。

男3 こういう事になってるって、言う事も。

女3 ちゃんと伝えました。

男3 そうなんだよね…。

男1 え、お父さん、なんだって…？

女3 凄く喜んでた。

女1 ほら、喜んでるんですよ！

男1 じゃあ良かった。

女3 早く会いたって。

女1 ほら！

男1 うん。

女2 早く会いたって言う人がなんで野球の練習始めるの？

女1 ……ウキウキしちゃってジツとしてられないのよきつと。

女2 結構ジツとしてたと思うけど？

女1 ……

男2 まあ、こうして話していてもしょうがないですよ。ただの憶測で終わってしまいますから。

男3 でも聞いたところで、アレでしょう…、その金属バットはなんですかって、正直に答えてくれるとは思えませんよ？

男2 まあ、そうですね、言う訳ないですよ、これから人を殺そうとしているなんて…。

女3 お父さんはそんな人じゃありません。

女1 私もそう思います！

男3 だからどうしたものやらと思わしてね…。

皆、男1を見る。

男1 あのお？

他 はい。

男1 え、お父さんが、金属バット持って暴れてたんですか？

男2 いや、暴れてはいませんでした。ただ、立ってたんです、バット持って。

男1 …背広で？

男2 背広で。

男1 …。

男2 どうします？行きます？

男1 …警察を呼んで、何やってるのか聞いて貰いましょう。

男3 でも、バット持ってるだけですからね…。

男2 それにもし、警察に通報して、それでなんでも無かった時にしこりが残りませ

んか、奥さんこれから一緒に暮らして行くんですよ？

男3 それは後々、気まずいですよね？

男1 …そう、ね。

間。

男2 いやあ、しかし大きな人でしたね。

男3 ええ、大きかったですね。

男2 ニメートルくらいあるんじゃないですか？

男3 それくらいありそうでした。

女1 ニメートルは越えていますよ。

男2 越えてるかもしれないね。

女1 もしかしたら三メートルくらいあるんじゃない？

女2 そんな人間は居ないけどね。

女1 そう。

男1 …。

男2 身体も、こんなでしたね。

男3 ええ。

女2 プロレスラーかと思った。

女1 プロレスラーなんじゃない？ねえ？

女3 ただの、サラリーマン…。

男2 相当鍛えてるんだね、じゃないとなかなかあの身体にはならないですよ。

男3 何かに取りつかれたように一心不乱に鍛えたんですねきっと。

男2 そういう事ですね…。

女3 …。

女1 これからプロレスラーなるんですよ！早苗ちゃんに内緒で。そうだね、だから

金属バット持ってたの！これなら納得が行きます。

男2 なるほど、悪役のね。

女2 サラリーマンを辞めて？

女1 そう、サラリーマンという、マスクマンになるのよ！

女2 どうしてもプロレスラーにしたいのね。

女1 だってそうでもしないと…。

女1、涙を堪える。

女3 ありがとう…。

女1 あんなに強くて優しそうなお父さんなんですよ…。

男2 幾ら優しそうでも、金属バット持ってるんですよ。

男3 あー、どうして金属バットなんて持ってたんだ…？

女3 お母さんはどう思う？お父さんの気持ち、分からない？

男1 …そ、そうね、あの人の事だから、うんと…。

女2 お父さんの気持ちよりも、奥さんの気持ちだと思つよ私。

女3 え？

女2 もしお父さんがあなたの事を今でも許せなくて、ぶつ殺したいと思つていたら

したら、金属バットで殴られても仕方がないと受け入れる覚悟、ありますか？

男1 無いです。

女2 なんで無いの？信じられない。

男1 だって殺されちゃいますから…。

女3 でも私は信じたい、お父さんの事。

男3 早苗ちゃん…。

女3、貝殻の上を歩いて男1の元へ。

女3 はい、お母さん。

男1 …あ、うん。

女3 お母さんのサンダル。

男1 …うん、そうね。

女3 もしかして、足のサイズも変わっちゃった？

男1 あ、ううん、ちよつと、ヒールがね…。

女3 ヒール？

男1 …うん。

男3 どうしてヒールが気になったんですか？あなたまさか、走つて逃げるつもりじゃないですよ？

男1 いや、そんな事は…。

男2 あんたそれはひどいよ。一番やっつてはいけない方法ですよ。

男3 あなたが、旦那さんの事を信用してあげないでどうするんですか？

男2 そりゃあ浮気をする女ですから、信用なんかしませんよ。

男3 そうですね…。

二人、アキレス腱を伸ばす。

男3 私、学生時代は陸上部だったんです。今でもマラソンが趣味で、良く走つてます。

男2 私も、ラグビー部でしたから、タックルには慣れてます。

男3 それはいいですね。

女子二人もそうする。

男1 …一つ、質問してもいいですか？

男2 どうぞ？

男1 私はもう、どうしたらいいですか？

男2 …は？

男1 もし、私は本物の奥さんじゃないと言つたら、私はどうなりますかね？

女1 なんでするかそれ、何かのクイズですか？

男1 もう頭が回らなくなって来まして…。

男3 本物の奥さんじゃなかったら、なぜ奥さんになり済みましたのか、我々はその理由を探るでしょうね。

男1 ですからそれは、ここから出たい一心なんですけどね。

男2 自殺をしようとしていた男が、なぜ急に早苗ちゃんのお母さんになろうとしたのか。

男1 うん、ですから、ここから出たい一心なんですけどね…。

女2 どうしてそんな嘘を付く必要があつたんですか？誰も得をしないじゃないですか。

男2 そうですよ。そんなのいつかバレルに決まつてる。

男1 そんなの分かつてますよ。でもそうでもないところから出してくれないじゃないですか。

女1 じゃあさっきの言葉も嘘だったんですか？早苗ちゃんと、ずっと一緒に暮らして行くつて言つたじゃないですか。

男1 あれも、嘘を付きたくてついたんじゃないんですけれど…。

女1 そうだわ、旦那さんが許してくれるか分からないから不安になったのね？早苗ちゃんは許してくれたんです。その早苗ちゃんが大丈夫だって言ってるんですからきつと大丈夫ですよ。

男1 だって二メートル近いプロレスラーの様な男が、背広を着て、金属バットを持って待っているなんて、そんなバイオレンスな場所に行ける訳ないでしょう。

女1 私達はまだ子供だから分からないのよ。誰か、分かりませんか？嬉しい事があって金属バットを持つ気持ち、誰か、教えてくれませんか？

男3 他人が何を考えているかなんて、どれだけ生きてても分からないよ。

女4、日傘を閉じて、地面に落とす。

皆、一瞬そちらに目を向けるがすぐに戻って、

女2 あなたはそんな誰も喜ばない嘘を付いて、何がしたかったですか？私達をからかったんですか？

男1 からかってはいないんですけど、いや、からかわれているのは私の方で…

男2 私達はどうでもいいですよ。この子の気持ちはどうなるんですか？母親の帰りを、ずっと待っていたんですよ？それなのにあなたは、そんな軽い気持ちで母親の振りをしたんですか？

男1 軽い気持ちではないんですけど…

女2 私達に何か恨みでもあるんですか？田舎者だからですか？

女3 …どうして？どうしてそんな事ばかり言うのお母さん…？

男1 …早苗ちゃん、ごめんね、おじさんは、嘘をついていたんだ。

女3 もう止めて、もう分からない…。お母さんの考えてる事はいつも、私には破天荒過ぎるわ。

女4、帽子を取って、地面に落とす。

皆、一瞬そちらに目を向けるがすぐに戻って、

男2 どうした？

女2 もしお母さんに成り済ましていたとしたら、その人は、早苗ちゃんの本当のお母さんの事を知ってるんじゃないかしら。

男3 うん、それで？

女2 何かを知らせに来たのよ。

男1 何を？

女2 奥さんはもう、亡くなっているのかもしれない…。

女3 え？

男3 なるほど、お骨を生まれ故郷に納めに来たんだね。

女2 そう。

男2 いいね、それは良い。

男1 うん、いいですね。

男2 ですね。

男1 じゃあ、そっち方向で。

他 は？

男1 …。

男2 でも知り合いつてなんですか？ただの知り合いがわざわざそんな事しに来ますか？

男3 そうなんですよね…。

女2 早苗ちゃんのお母さんの浮気相手なのよ。

男2 そうか、そういう事か！

男3 そっち方向は？

男1 嫌ですよ。

他 え？

男1 だって旦那さんが金属バット持ってるんですよ？浮気相手なんて嫌に決まってるじゃないですか。

他 …。

男1 もっと他にないですか？

男3 …あなたは、何を言ってるんですか？

女2 まさか、

男1 私にも分らないです。どうしたらいいのやら…。

男3 あなたの事なんですよ？あなたが分らないんじゃないんですよ。

男2 そうです。我々は、本当の事が知りたいだけなんです。

男1 本当の事は、ずっと最初から言ってるんですよ。私は、ただ、海を見ていた  
だけなんです。何にもしてないんですよ私。

皆、ため息を吐く。

女4 もため息を吐いて、靴を脱いで、揃えた。

皆、見る。

男1 あの人は…なんなんですかね？

男2 あなたね、他人の事を気にしている立場ですか？あなたは今、大嘘付きになり

かけてるんですよ？

男1 あ、まだ嘘だつて信じて貰えてないんですね…。

男3 全てが嘘だったとしたら、我々がここまでしてきた議論は、一体なんだったの

か…。

男1 警察は、いつになったら呼んでくれるんですか？

男2 ですからそれも、あなたが何者か分かっただけに通報してもいい。私は、あ

なたを信じてるんです。

男1 私はいつまでこんな風に監禁状態なんですか？

男3 監禁だなんて大げさな、こんな青空の下ですよ？

男1 あなた方はどうしても私をここから出してくれないんですね。

男3 え？

男1 目的はなんですか？一体私をどうするつもりなんですか？

男3 目的と言われても、

男2 え、あなたは私達が好きであなたを足止めしてると思ってたんですか？

男1 だってそうでしょう？ああ言えばこうと、何かとこじつけて来るじゃないです

か。

男2 真実が知りたいだけなんです…。

男1 真実は何度も言っているじゃないですか、私は何もしてないんです。

男3 ええ、あなたがそう言うから、一生懸命決めてあげてたんじゃないですか。

男1 …は？

男3 それなのに全部あなたが否定するから…。

男1 だって私は本当に何もしてないんです。ただ海を見ていただけなんです。

男3 見る事は誰だつて常に行っていますよ。私だつて今あなたを見ている。それ以外

には、何をしていたんですか？

男1 ですから…何もしてないです…。

男3 何もしてない人というのは恐ろしいですよ、これから何をするか分からない。

せめて何かをしてくださいなと。

女4、鼻歌を歌い、

男1 あの人は…、

海を覗きこむ。

男1 何をしていると思いませんか？

男3 あれはあなた、

男1 なんですか？

男2 海に飛び込むんじゃないですか？

男3 ですよ。

男2 ええ。

男1 そうですよ。私もそう思います。

男2 何が言いたいんですか？

男1 いいんですか？止めなくて。

男3 え？

男1 君、止めないんですか？

女1 え？

男1 だって私の時はあんなに止めたじゃないですか。

女1 あの、ここ、浅いんです。

男1 ええ…。

女2 低いしね。

女1 うん。

男1 いや、でも、え、この辺りの人は、服を着て海に飛び込んだりするんですか？

男2 ちよつと、そんなに南国じゃないですよ。

男1 だったら、ほら、靴を揃えて、物思いに耽っている。私と同じじゃないですか。

女1 何がですか？

男1 だから、自殺するかもしれませんよ？

女1 あの人がですか？

男1 ええ。

女1 …そんな風に見えないですけど、ねえ？

女2 うん。

男1 え、だって一緒じゃないですか…。

女1 一緒じゃないですよ。

女4、体操を始める。

女1 ほら。

男1 …。

女2 あんまりジロジロ見ない方がいいですよ。

男2 そうですね、見ない振りをしましょう。

男3 それよりあなたです、さあ、何者なんですか一体。

男1 私には、あの人がよっぽど不審者に見えるんですけど…。

女3 …あれ？

女1 どうしたの、早苗ちゃん？

女3 …お母さん？

他 え…？

女4、につこり微笑んで、海に飛び込んだ。

男1 …え？

皆、防波堤の上に駆け寄る。

女2 どういう事？あなたのお母さんだったの？！

女3 わからない、でも凄く似てたから…。

女1 でもそれじゃあおかしいじゃない、お母さんが二人居るって事？

男1 だったらその人がお母さんですよ！帰って来たんですよ。早苗ちゃん、君に会いに来たんだよ。それなのに全然気付いて貰えなかったから…。

皆、防波堤の下を覗き込む。

男1 …どうしました？無事なんですか？

男3 …見事な泳ぎだ。

男1 …え？

男2 水中を舞うように泳いでいる。まるで人魚ですね…。

男1 …泳いでるんですか？

皆、歓声を上げて、拍手をしたりする。

男1 え、何やってるんですか？…ねえ？

女4、全身ずぶ濡れで上って来る。

皆、呆然。

女4 ほら、サザエ。

女4、大きな貝を女3に渡す。

女3 …大きい。

他 …。

女4 ふー、やっぱり綺麗だわ、こっちの海。

女4、濡れた髪を手でほぐす。

女3 …お母さん？

女4 さて、私は誰でしょう？

女3 え？

女4 お母さんとか妻とか、そんなのどうでも良くない？

女3 …。

女4、歩き出す。

女1 どこ行くんですか？

女4 バット持って仁王立ちしてる男が居るんですよ？

男3 あ、でも今行くのは…、

女4 あの人ホント何考えてるのか分からないけど、面白いじゃない。

女4、日傘を手に取り、一回素振りしてから去る。

男2 か、かつちよいい…。

皆、追いかけて行く。

男1 え、ちよつと…、ちよつとおー！！私も連れてってー！ねえ！ちよつとー！

男1、持っているハイヒールのサンダルに無理やり足を捻じ込み、  
恐る恐る貝の上を歩き、堤防に辿り着いた。  
深くため息をついて、

男1 …何をやっているんだ私は。

男1は、再び海を眺めた。

く終く

【上演記録】 2018年11月15日～19日 七ツ寺共同スタジオ



この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。  
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」までご連絡ください。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

[theatrical\\_unit\\_oysters@yahoo.co.jp](mailto:theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp)